

高等教育研究センター かわらばん

秋号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第32号

大学に流れる時間

日本の大学は、その源流を19世紀ドイツで練りあげられた大学モデルに辿ることが出来ます。

明治期に、このモデルを国情に合わせて取り入れたのです。

そこでは、将来へ向けて国民国家の担い手を再生産することが、

おもな存在意義となっていました。これに対して、最近ではグロ

ーバル化へ向かう経済環境のもとで、大学は、超国家的な企業

体と類似した組織形態へと姿を変えつつあります。

いまや、大学は企業として、そして大学教育はその企業が提

供する高額な「商品」として見られるようになりました。商品

には「質の保証」が求められ、ランキングの対象ともなってい

ます。学生とその保護者は、言わば、こうした商品を購入する

消費者やクライアントとして位置づけられます。

こうした変化を象徴的に示すのが、教育における時間のとら

え方ではないでしょうか。かつての大学では、いわゆる「教養」という、何ともとらえどころのない——しかし、それゆえに魅惑的な——ものが教育の基盤をなしていました。そもそも

「教養」という語は、生涯にわたる人格の形成を意味する

“Bildung”というドイツ語を訳したものです。永続的なプロセスとしての知の探究に

目覚めることが何よりも重視され、大学で流れる時間は、その

覚醒の瞬間が訪れるよう促すためにありました。この覚醒とい

うのは、何を教えられたかには本質的に関係なく、その背後に

発見すべき大切なものが存在していることに自ら気づくことな

りではないでしょうか。

したがって、ある意味で、学習にどれほどの時間を費やすかは、それほど問題にはならな

ったのです。大学で過ごす時間は、その枠をはるかに超えて、

個人の一生、あるいは人類による永遠の営みとの関係でとらえられるのですから、それも当然

かもしれません。大学の行事などですと前の卒業生にお話を

聞くと、ある年代の方々までは口をそろえて、学生時代にか

に勉強しなかったか(あるいは教員が授業をしなかったか)を

奇妙にも誇らしげに語ってくれます。今では考えられない自慢

の仕方ですが、これこそ、大学のモデル転換を徹的に示す現象

ではないかと考えています。かつての大学は、これでじゅう

ぶん役割を果たしていたのです。

これに対して現在では、所定の時間の中でいかに効率的に知識の所産を伝達・獲得し、優

れた成果をあげるかが求められるようになりました。そして、「単

位の実質化」をはじめ、時間がさまざまな点で厳しく管理され

ています。私見ですが、大学における教育や学習が、労働とのアナロジーでとらえられている

といえるでしょう。

以上のような傾向が世界的な趨勢であることは、まずは事実

として認める必要があります。その上で高等教育の充実につい

ても考えるべきでしょう。もちろん、かつての大学への素朴な

ノスタルジアから議論を立ち上げるわけにはいきません。しか

し、教育をもっぱら商品や労働という資本の交換との類比で発

想することに対しては、根本的な疑問を投げかけることが、大

学が大学としてあり続けるためには重要であると思えてならな

いのです。(木俣元一)

2010年度
名古屋大学学生論文コンテスト

●論文内容— 記事論文において与えられたテーマ・問い・事例等に就いて、文献等を引用して論じてください。内容範囲は問い・主題等、当該領域を専門としない人にも理解できるような範囲とさせていただきます。
●応募期間— 2011年1月14日(金)13時まで

学問のススメ、論文へススメ。

今年度の応募受付が
始まっています

学部学生にぜひ
ご紹介ください!

締切は来年1月14日です

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>

「大学教員をめざす君へ」を開催!!

高等教育研究センターでは「大学教員をめざす君へ コミュニケーションスキル向上のための2日間集中プログラム」を7月28日(水)・29日(木)に開催しました。大学院生やポスドクを対象とする課外ワークショップで、共催のFD・SDコンソーシアム名古屋に加盟する南山大学や中京大学からも参加者がありました。

今年度のプログラムはスキル中心、ワーク中心に企画しました。参加者からは、実践的な内容で学生としての研究活動にも役立てられそう、新鮮だった、もっと時間をかけて取り組みたかった、といった感想が寄せられました。当センターでは、来年度に向けたプログラムの検討がすでに始まっています。(齋藤芳子)



学んだばかりの基礎知識をもとにスライドを修正する



グループワークでファシリテーションを体験する



声色や間の取り方による違いを聴く

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメール
アドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

マイクロティーチング Microteaching

教員養成における教育方法のひとつにマイクロティーチングという手法があります。マイクロティーチングとは、5分から15分程度の短い時間で、小グループの学習者役を対象に教師役が模擬指導を行い、その批評や評価を受けて改善に取り組むことで、教授法の技能を習得する方法です。

マイクロティーチングは、学習者間で教員役と学習者役を決めて実施するロールプレイング法のひとつの形態といえます。看護婦役と患者役を決めて行う看護技術実習、被告人、裁判長、弁護人などから構成される模擬裁判実習など、現在ではロールプレイング法はさまざまな分野で活用されるようになってきました。マイクロティーチングは、1963年にスタンフォード大学で開発された手法とされています。当時は、5分間の模擬授業、10分間の評価と批評、15分間の休憩、5分間の再授業という構成でした。現在では、世界中の教員養成や現職教員研修において活用されています。また模擬指導の状況をビデオで録画し再生しながら改善点を検討するという方法も一般的になっています。

このマイクロティーチングという方法は、大学のFD活動においても注目されています。ハーバード大学にあるデレック・ボック教授学習センターの教授法研修のひとつの柱は、マイクロティーチングです。6名の教員が教師役と学生役を順番に担い模擬指導を行いながら、教授法の技能を向上していくという方法です。参加者が希望すれば教授学習センターのスタッフと共にビデオを視聴しながら議論することもできます。教授学習センターのホームページには、「マイクロティーチングは、短い時間で実施可能で、効果が実証され、かつ楽しい手法である」と記されています。

近年では、日本の大学のFD活動においてもマイクロティーチングを活用している事例が増えてきています。名古屋大学においては、英語による授業のワークショップや大学院生対象の大学教員準備プログラムなどで活用されています。(中井俊樹)

F・D・S・D教育改善支援拠点として認定されました

教育関係共同利用拠点の認定が、2010年から始まりました。教育関係の活動で実績のある大学を共同利用拠点として文科省が認定するものです。拠点大学のもつ人的・物的リソースの共同利用を促す一方、大学間ネットワークを構築することにより、大学全体の教育水準を向上させようとする取組です。

このうちF・D・S・Dでは医学教育、看護学教育、障害者教育の専門分野を特定したものの計3大学、それ以外計4大学です。この4大学には東北大学、京都大学、愛媛大学のほか、本学も含まれています。

このF・D・S・D拠点は、当センターが担当します。これまで「F・D・S・Dコンソーシアム名古屋」の幹事校として、名古屋地域の大学と連携して、各大学の教育力向上のために、各種のF・D・S・Dを実施してきました。東海地域の大学の教職員が一堂に会して、各大学における教育改善の取組状況や今後の

進め方について率直に意見交換を行う「大学教育改革フォーラムin東海」を、毎年1回開催しています。学内では、物理学、哲学、経済学の各専門分野別の教育改善、英語による授業の支援、職員向け研修の実施、大学教員志望の大学院生向けの教育能力形成ワークショップ等を開催しています。さらに、これらの活動を支える各種教材の開発を進めています。これら活動内容については、本紙でもたびたび紹介してきました。今回の認定は、こうした実績や他大学への普及の可能性が認められた結果といえます。(夏目達也)

近年、F・D・S・Dに関しては、全国各地で大学間のネットワークが形成されており、複数大学が協力して教育改善に取り組むことが一般的になってきました。共同利用拠点の認定を受けた大学は、こうしたネットワーク間の交流の促進を図ることになります。当センターでは、幅広い大学と連携して、従来の活動をさらに充実させる予定です。これにより、学生の教育を重視しつねに質の向上をめざす本学の姿勢を、全国に向けてアピールすることが出来ます。学内のF・D・S・Dについても、さらなる充実・発展に努める所存です。

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『不純なる教養』

白石嘉治 著 青土社 2010年

大学と思想をめぐる本書において、著者は一貫して、ネオリベリズム(小さな政府による市場競争に任せた政治)を批判し、大学は市場原理から解き放たなければならないと主張します。

著者のネオリベリズム批判は、もしこれが拡大推進されれば、人間の存在のような値段のつけられないものまで資本の論理に取り込まれてしま

いかねないという危惧に発しています。そして、いまや市場原理に取り込まれつつある大学には、政治経済などとは一定の距離をおいて思想を営む「不純な」場所だからこそ世界を動かす力を持ち得た歴史があります。この史実を紐解きながら、値段のつけられない公共的な価値を認められてこそ大学は存在する意義があるのではないのか、と

著者は問うのです。

ヨーロッパでは学費が低額に抑えられ、米国では奨学金が充実しているなど、世界的には大学が無償であることが常識、良識とされています。一方日本の大学では、公的資金の削減によって学費の値上がりが続きます。そのなかで大学の無償化を唱え、市場原理との切り離しを訴える本書は、一見すると無力にしか映らないかもしれませんが、けれども、大学の価値について改めて考える機会を与えてくれる一冊です。思わずひきこまれる文体の快楽とともに、深く味わっていただけたらと思います。(西原志保)

高等教育研究センタースタッフ(2010年10月現在)

センター長 木俣元一
専門領域: 西洋中世美術史

教授 夏目達也
専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論

准教授 近田政博
専門領域: 比較高等教育学、学習支援

准教授 中井俊樹
専門領域: 大学教授法、高等教育マネジメント

助教 齋藤芳子
専門領域: 科学技術社会論

研究員 西原志保
専門領域: 日本語表現、文学教育、日本古典文学
伊藤奈賀子
専門領域: 高等教育学、アカデミックライティング

<平成22年度 客員>
陳 向明 (中国・北京大学)
キャサリン・マナトゥンガ (オーストラリア・クイーンズランド大学)
羽田貴史 (東北大学)
飯吉弘子 (大阪市立大学)
福留東土 (広島大学)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市中種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/